

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2006.12) 7巻1号:86～88.

第28回日本高血圧学会～学会報告と三つの副産物～

長谷部直幸

学界の動向

第28回日本高血圧学会 ~学会報告と三つの副産物~

長谷部 直 幸*

高血圧は、いかなる開発レベルの国々においても最も頻度の高い生活習慣病であり、現在わが国では3700万人、世界では9億7200万人の患者が存在すると言われています。試算によれば2025年にはその患者数は15億6000万人に達するとされ、世界人口の30%が高血圧患者になる時代が来るかもしれないとさえ言われています (Lancet 365: 217-223, 2005)。その最大の理由は、高齢化と肥満の増加にあります。近い将来、肥満のためにアメリカ人の寿命は短縮に転じるであろうと指摘されています (N Engl J Med 352: 1138-1145, 2005)。内臓脂肪の増加 (これを反映する腹囲で、男性85cm、女性90cm (女性の基準は今後80cm程度への改訂が予想されます)) を背景に、高血圧 (130/85 mmHg 以上)、高脂血症 (中性脂肪150mg/dl 以上、HDL-C (善玉コレステロール) 40mg/dl 未満)、高血糖 (空腹時血糖値110mg/dl 以上) は同じヒトに集積する傾向があり、これらのリスクの数が増えるほど動脈硬化は進展し、脳卒中や心筋梗塞が発症し易いことが知られています。そこで、これらの基準を満たす人々を“メタボリックシンドローム”と呼び、早い段階から過食と運動不足の生活習慣を改善するよう働きかける方策がとられているわけです。このような背景を踏まえ、わが国の高血圧治療のガイドラインが2004年暮れに改訂されました。私も作成に参加させていただきましたが JSH2004 と呼ばれるそのガイドラインの中で、最も強調されているのは「脳・心・腎などの臓器保護のためには、より持続的かつ厳格な降圧を目指すべきである」というメッセージです。

第28回日本高血圧学会総会は、「高血圧・標的臓器障害の予防と徹底管理 -JSH2004 の活用-」をメインテーマに、旭川医科大学第一内科 (現: 循環・呼吸・

神経病態内科学分野) の菊池健次郎教授を会長として、2005年9月15~17日の3日間、北海道旭川市の市民文化会館と旭川グランドホテルの二会場で開催されました。例年10月に行われる本学会ですが、旭川での開催に当たり会期を1ヶ月早めることと致しました。今回の総会は、第7回日中高血圧シンポジウムとの合同開催でもあり、国内はもとより、中国はじめ海外から1600名あまりの参加者を迎えることができました。メインテーマを展開するために、各々二つずつシンポジウム、関連学会教育講演、キーノートレクチャーを企画し、高血圧を巡る今日的な論点に関するディベートも三題企画しました。菊池教授の会長講演では「高血圧・標的臓器障害の予防 -成因・病態を踏まえて-」と題して、旭川医科大学第一内科の基礎・臨床研究成績を紹介しながら、動脈硬化・心疾患・腎障害など臓器障害の征圧を目指す高血圧治療のあり方と方向性への提言がなされました。特別講演は、ハーバード大学留学時代の私の恩師でもあり、現在米国ニュージャージー医科歯科大学の SF Vatner 教授が、「ストレス抵抗性と長寿獲得に向けた新たな分子循環器学の展開」について講演されました。

基礎シンポジウムは「基礎研究と大規模臨床研究の解離を埋める」ことを目標に企画され、「ARB は心筋梗塞を抑制できないのか」(光山)、「抗動脈硬化に作用し得る Ca 拮抗薬の作用は何か」(松岡) や「抗酸化・抗炎症機序を介する抗動脈硬化作用」(江頭)、「脳保護・認知機能保持に必要な薬理作用は何か」(堀内) や「新規糖尿病発症抑制に必要な薬理作用」(浦) の5演題を通して、基礎と臨床の成績の一致・矛盾点が浮き彫りにされ、今後の研究解明の方向性が明らかにされました。臨床シンポジウムは改訂された

*旭川医大 循環・呼吸・神経病態内科学分野

JSH2004の徹底活用をテーマに、「JSH2004が強調する改訂点」(荻原)を網羅し、「生活習慣の修正」(安東)、「家庭血圧の活用」(今井(潤))、「腎疾患・糖尿病合併高血圧の降圧療法」(島本)、「脳血管障害の予防に向けた降圧」(島田)、「冠動脈疾患合併高血圧の至適治療」(長谷部)などについてディスカッションされ、特に腎臓学会から、日本人におけるGFR(糸球体濾過率)評価法の改訂について特別発言(今井(圓裕))がなされました。また、今回初の試みとして、高血圧治療の臨床的なリーダーでもある特別正会員(FJSH)を対象として特別シンポジウムを企画し、高血圧診療および高血圧学会の裾野の拡大に果たすFJSHの役割を論議していただき、将来の専門医制度化を視野に、その意義と今後の活動の方向性が確認されました。

関連学会の教育講演として、妊娠高血圧学会の佐藤和雄理事長から「妊娠中毒症の分類・治療」について、また内科学会から昨年第102回内科学会会長の松沢佑次先生から「メタボリックシンドロームの診断と分子機構」について解説がなされました。キーノートレクチャーIでは、家庭血圧測定の意義(今井)と正しい測定法(栃久保)が解説され、IIではわが国で進行中の高血圧学会関連の8つの臨床研究(DIME(植田)、CASE-J(荻原)、JATOS(石井)、VALISH(松岡)、COPE(松崎)、HOMED-BP(大久保)、HOSP(河野)、J-CHEARS(大内))の各推進者からそれぞれの試験の目指すものと期待される知見、さらにその意義がアピールされました。ディベートでは、各々の演者がproとconに徹することを原則に「超高齢者の降圧療法は積極的に行うべきである(con松浦 vs.pro大内)」「もう医師は診察室で血圧を測るべきではない(con桑島 vs.pro久代)」そして「脳卒中二次予防には利尿降圧薬を使うべきである(pro棚橋 vs.con島田)」という現在議論のある三つの興味深いテーマが選択され、白熱したディベートを通じて高血圧治療の問題点が浮き彫りにされました。特に「もう医師は診察室で血圧を測るべきではない」では、臓器障害合併頻度の高い「仮面高血圧(診察室では正常血圧値で、家庭では高血圧)」の診断の上からも、家庭血圧測定の意義が強調されました。

今回のYIAは何れ劣らぬ学術的意義の高い5編の最終候補論文の中から旭川医大の藤野貴行先生と筑波

大学の石田純治先生の二氏に最優秀賞が送られました。Hypertension Research誌に掲載された年間優秀論文を表彰するNovartis賞には3編の受賞論文の中から札幌医大の荻原誠先生に最優秀賞が送られました。高血圧学会の学会誌である同誌は、UMINのELBISを介してWeb投稿・査読が可能となり、国際化と同時に省力化・迅速化が図られることになり、その経緯について特別報告をしていただきました。

一般演題として380題が採択されましたが、その内20題の高得点演題に反映された高血圧研究の方向性を見てみますと;腎、レニン・アンジオテンシン系では遺伝子改変マウスを用いた基礎研究に加え、腎機能障害時の血圧変動やコントロール不良の機序を解明する基礎・臨床研究が報告され、JSH2004における厳格な降圧目標設定の理論的背景を強固にするものでした。遺伝子解析では高血圧・動脈硬化の疾患感受性遺伝子解析の最先端と現状が報告されました。インスリン抵抗性に関わる新たな機序が報告され、骨髄幹細胞の機能解析と脳・心筋虚血障害に対する血管新生療法が報告されました。疫学・臨床研究では、J-LITから糖尿病合併例での厳格な降圧の重要性、J-TOPPからbaPWVと微量アルブミン尿の関連性、大迫研究と健康長寿計画から家庭血圧測定の意義が報告されました。一般演題は、口演12、ポスター53のカテゴリーで発表が行われましたが、口演では各セッションを代表あるいは総括するプレナリーレクチャーが5つ企画され、各セッションの討議が活性化されました。

第7回日中高血圧シンポジウムは日本側札幌医大島本教授の「わが国におけるメタボリックシンドロームの実態とインスリン抵抗性」、中国側西安交通大学Zhuo-Ren Lu教授の「内因性ウアバイン物質の降圧薬としての可能性」の二特別講演を中心に日中3題ずつの口演が行われ、活発なディスカッションが交わされました。さらに、高血圧学会のinternational sessionとの合同で海外から12題の口演と25題のポスター発表が行われました。

症例検討では内分泌性・妊娠関連高血圧の興味深い4症例を題材に詳細な検討が行われ、コメディカルセッションでは、家庭血圧測定(石光)、和風DASH食(中井)、高血圧教育(神出)の各テーマで有意義な教育講演が行われました。最終日午後の市民公開講座では、例年の予定数を上回る400人の参加者を得て、

